

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/>

## 目 次

|   |    |
|---|----|
| 平成16年度附属図書館業績報告<br>及び平成17年度計画について ..... | 1  |
| 「地域環境史」へのアプローチ<br>(秋山晶則).....           | 6  |
| 学校図書館はおもしろい(小倉文子) .....                 | 8  |
| 本学教員著作物の寄贈リスト .....                     | 11 |
| 利用者から見た図書館 .....                        | 12 |

## 平成16年度附属図書館業績報告及び平成17年度計画について

### 名古屋大学附属図書館

#### はじめに

国立大学法人としての初年度が終了し、平成16年度計画については実施状況を実績報告書としてとりまとめ、6月末に文部科学省に提出したところである。附属図書館においても、大学全体の年度計画に含まれている事項はもちろんのこと、図書館の年度計画(事業計画でもある。)で提示した事項のレビューを行い、商議員会で了承を得た上で、部局の事業実績報告書として本部に提出した。

また、平成17年度計画については、平成16年度計画の実施状況を踏まえて、年度計画案を作成し、商議員会で了承をいただいた。これらの資料は、いずれも図書館のホームページで閲覧可能になっているが、特に重要な事項について背景等も示しながら以下に報告する。

#### 平成16年度事業実績報告

##### 1) 学習支援

###### 学習用図書の整備

本学は中期目標のなかで、「学生の学習に対するサービスを充実し、その支援環境を整備する」こと、並びに「教育学習に必要な資料・情報の収集・提供に努める」こととし、その目標を達成するために、種々の取り組みを行って

る。附属図書館においても、「シラバスの活用、教員推薦図書制度、蔵書整備アドバイザー制度等により、教育内容に密着した学習用図書を整備する」と年度計画で提示し、平成16年度も前年度とほぼ同額の学生用図書購入費を確保した。これによって、新刊書の整備に努めるとともに、特にシラバスに掲載されている参考文献を調査し、中央図書館未所蔵のものについては全て整備した。また、蔵書整備アドバイザーによる蔵書の点検も行われ、授業や学習に密接に関連した図書の整備が進んだ。しかし一方、学習用図書の年間の購入冊数を学生1人当たりで見ると、1人0.5冊程度であり、継続して更なる充実に努める必要がある。

###### 情報リテラシー教育支援

附属図書館では、電子ジャーナルや電子ブック等の電子情報資源の整備を積極的に進めている。学生等がこれらの電子情報資源を学習に効果的に活用するためには、それらを充分使いこなせるようになることが必要で、附属図書館では、これを以下のような情報リテラシー教育支援プログラムとして実施した。

図書館ガイダンス：図書館利用や情報資源等の利用方法についてのガイダンスを全学

で66回開催した。

TAガイダンス：学生、特に新生生に対する図書館利用指導を徹底するために、共通教育の基礎セミナー科目を担当する約150名のTAに対し、情報リテラシー指導のためのガイダンスを実施した。

パスファインダー：特定のトピックや主題に関する情報を収集するための手引き（パスファインダー：道しるべ）の整備を教養教育院と協力して進めた。

利用者用PC：学生が蔵書検索やインターネットを利用できるPCを増設し、利用者用PCの数は、合計118台となった。

## 2) 研究支援・学術情報基盤の整備

### 学術デジタルコンテンツの整備

附属図書館では、本学の教育研究を支える学術情報基盤として、電子ジャーナル等の学術デジタルコンテンツの導入に力を入れている。

電子ジャーナルについては、平成16年度、LexisNexis Academic、LWW (Lippincott Williams & Wilkins)、OUP (Oxford University Press)、UniBio Pressを新たに導入した。その結果、導入タイトル数が年度計画の目標であった12,000タイトルを超えた。利用状況も急速に伸びていることから、電子ジャーナルは、もはや本学の研究教育には不可欠の情報資源であり、今後とも維持・拡大を図っていく必要がある(図1)。

また、附属図書館は、国立大学図書館協会電子ジャーナル・タスクフォースの主査館とし

て、全国の国立大学における電子ジャーナル導入のために世界的に見ても有数のコンソーシアム形成にも貢献した。

電子ジャーナル・タスクフォースは、毎年平均約9%値上げされてきた外国雑誌価格を5%以下に抑える「キャップ制」を出版社に認めさせる等、できるだけ有利な条件で電子ジャーナルを導入できるように努力を重ねてきたが、現状の電子ジャーナル導入方法については、なお種々の課題がある。特に全タイトルアクセス(出版社が発行する全ての電子ジャーナルを利用できる契約モデル)については、雑誌の購読規模を維持しなければならないという条件が付されている。雑誌価格の上昇と厳しい財政事情によって、部局における購読中止が続いているために(図2)、電子ジャーナルを継続して導入するには、補填の経費をどのように捻出するかが問題となる。これまでの取り決めによって部局からの拠出が原則となっているが、間接経費等による対応もあり、大学として学術情報基盤を整備するという観点から、新たな財源確保の仕組みの検討が課題である。

さらに、従来の商業出版に対抗するかたちで展開されているオープンアクセスや機関リポジトリによるセルフアーカイブ運動等への協力・連携を通して、学術コミュニティに有利な契約モデルの開発を進める等多方面からの取り組みも必要である。

平成16年度の新たな取り組みとして総長裁量経費をいただいて、電子ブック(NetLibrary)

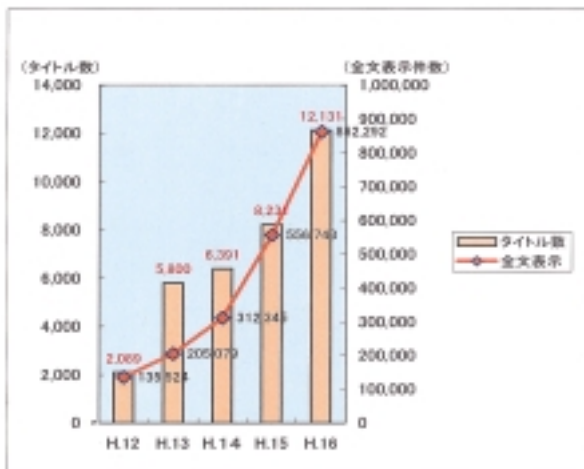


図1 導入電子ジャーナルタイトル数と電子ジャーナル全文表示件数の推移

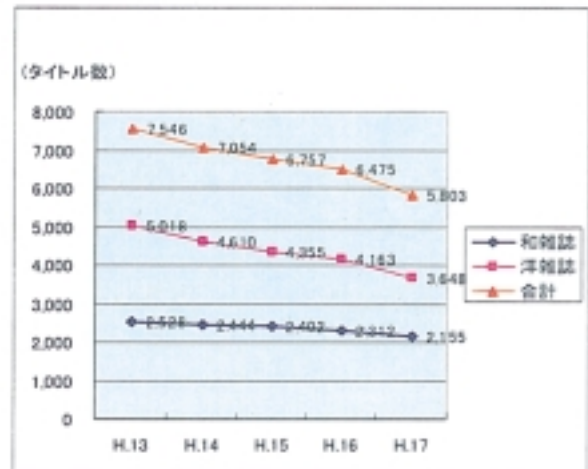


図2 購読外国雑誌タイトル数の推移

を導入した。ここでいう電子ブックとは、学術図書(洋書)の電子版のことである。現在約3,700タイトルが学内のどこからでも閲覧可能となっており、各自が学内で手続きをすれば、学外からのアクセスもできる。電子ブックは新しいかたちの情報資源であり、大学院生や留学生等への学習支援も視野に入れて導入したが、いろいろな活用方法が考えられることから、平成17年度もタイトル数の拡大を図ることとしている。

#### 資料の電子化・データベース化

本学は、伊藤圭介文庫や高木家文書等多数の貴重資料を所蔵しており、これらを標準的なメタデータを付して、電子化し、公開する作業を進めている。平成16年度は科学研究費補助金の措置を得て、伊藤圭介文庫や高木家文書の貴重資料を収録したエココレクション・データベースを構築した。また、神宮皇学館文庫を始めとする和古書及び漢籍について、内容がわかる注釈をつけた名大システム 古典籍内容記述的データベースの作成を開始し、いずれもホームページ上で公開した。

#### 研究開発

本学附属図書館の特徴のひとつが強力な研究開発体制を有していることである。平成13年度に設置された研究開発室には2名の専任教員と9名の兼任教員が配置され、ハイブリッド・ライブラリ機能の強化及び図書館サービスの高度化に関する研究開発を活発に進めている。平成16年度は、以下の課題に取り組んだ。

##### 年2回の資料展示会・講演会の開催

資料電子化(エココレクション及び古典籍データベースの構築)

学術ナレッジ・ファクトリー計画の推進

学術資料・標本類の保存環境に関する研究開発

電子図書館国際会議の開催準備

##### 学術機関リポジトリプロジェクトへの参加

学術機関リポジトリとは、大学等の学術機関が所属する研究者等の研究成果を機関として蓄積し、永続的に保存して、情報発信するもので、大学にとっては知名度の向上や社会に対する説

明責任の履行、研究者にとっては、セルフアーカイビングに基づく研究成果の広範な流通が期待できる。さらに、大手雑誌出版社の独占を抑止する競争的環境を醸成し、学術情報流通の主体を学術界に取り戻すとともに、持続可能な学術雑誌の契約モデル形成につながる可能性を持つ。

附属図書館は、平成16年度、国立情報学研究所と6国立大学附属図書館の共同事業である「学術機関リポジトリソフトウェア実装実験プロジェクト」に参加し、プロトタイプシステムの構築を行った。その成果を踏まえ、平成17年度からは試験運用を開始することとしている。

### 3) 社会貢献・社会連携

#### 図書館の開放

大学の社会貢献として、保有する知的資産を広く社会に還元することが求められている。図書館の開放もその一環であり、平成14年度から学外者に対するサービスを大幅に拡大し、その要請に応えようとしてきた。その結果、学外者の利用は急速に伸びており、平成16年度は、一般市民の利用が大幅に増加し、年間の入館者数は3万5千人を超えた(図3)。

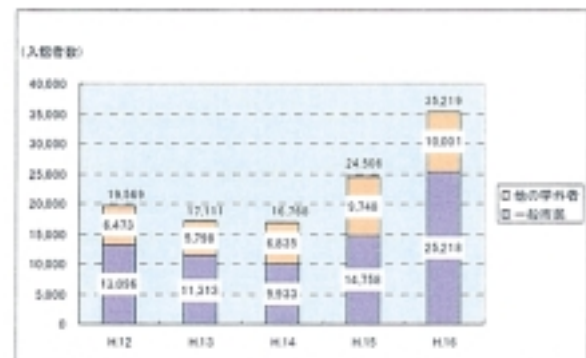


図3 学外者の入館状況の推移

#### 資料展示会、講演会の実施

附属図書館及び研究開発室の行事として、年に2回、資料展示会及び講演会を開催している。平成16年度は、春季に「和歌の書物～新古今和歌集とその周辺」、秋季に「川とともに生きてきた - 東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術 - 」と題した展示会及び関連の講演会を開催した。期間中の展示会来館者、講演会参加者はそれぞれ1,300人と360人で、いずれも過去最高となった。

### 東海地区図書館協議会の発足

地域住民の多様な情報ニーズに応えていくために、東海地区4県の大学図書館と公共図書館が協力して、平成16年11月に東海地区図書館協議会を発足させた。本学は協議会の会長館を務め、今後、資料の相互貸借、共同レファレンスサービスや資料の電子化、職員研修等の協力事業を進めていくこととしている。

### 「図書館友の会」の発足

図書館友の会は、名古屋大学附属図書館と市民との交流を目的とした取り組みのひとつであり、平成16年10月に発足した。友の会は、会員への図書館行事に関する情報の提供、会員間の交流事業、図書館が開催する様々な行事、図書館の諸活動に対する支援等をその活動内容としている。

## 4) 業務運営の改善・施設設備の整備

### 大学図書館業務分析の実施

法人化後の大学運営は益々厳しさを増し、様々な面で効率化が求められている。図書館では、民間のシンクタンクと共同して、現状の図書館業務について詳細な業務分析を行い、業務改善についての客観的な根拠を得ることを目指した。作業は、平成16年10月に開始され、図書館業務の機能定義、職員全員の業務別時間数調査、業務の達成度と情報システム支援度判定調査等を実施した。図書館では、今後この分析結果を業務改善方策の策定に活かしていくことにしている。また、分析は名古屋大学附属図書館の業務を対象としたものであるが、その手法や分析結果は、同じ構想を持つ他組織・機関の参考にもなるであろう。

### 中央図書館の整備

当初の年度計画にはなかったが、大学本部の支援を受けて、閲覧室の照明システムや階段まわりの壁紙を年度末に刷新した。照明システムでは、1階及び4階書架スペースの照明をセンサー対応にするとともに、閲覧スペースでは十分な照度を確保できた。また、壁紙が新しくなったことで、エントランス部分が明るくなり、入館したときの印象がよくなったという利用者

の声も聞いている。

## 平成17年度事業計画

附属図書館の平成17年度計画を平成16年度のそれとの関連で示したのが表1である。

表1 平成17年度計画の事項数

| 中期<br>目標 | 中期計画<br>事項数 | 平成17年度計画事項数 |     |     |     |
|----------|-------------|-------------|-----|-----|-----|
|          |             | 継 続         | 変 更 | 新 規 | 合 計 |
|          | 49          | 44          | 14  | 10  | 68  |
|          | 15          | 10          | 2   | 1   | 13  |
|          | 7           | 8           |     | 1   | 9   |
|          | 3           | 2           |     | 1   | 3   |
|          | 9           | 6           | 2   | 1   | 9   |
| 合計       | 83          | 70          | 18  | 14  | 102 |

- : 大学の教育研究の質の向上に関する目標
- : 業務運営の改善及び効率化に関する目標
- : 財務内容の改善に関する目標
- : 自己点検評価及び当該情報に係わる情報の提供に関する目標
- : その他業務運営に関する重要目標

「継続」は、平成16年度と同様の記述、「変更」は、継続ではあるが、数値目標等が変更された場合等が含まれる。以下、「変更」と「新規」のなかから主要な事項を紹介する。( 数字の記述は、年度計画の事項である。)

### 1) 教育支援

電子版参考図書を導入を図る。

電子的情報資源の拡大として、平成16年度Gale virtual reference libraryのトライアルを実施し、平成17年度から導入を開始した。現在、7タイトルの事典、文献目録等が利用できる。

パスファインダーの開発による学内の教育プログラム支援機能の強化を図る。

作成したパスファインダーを順次ホームページで公開し、学生の学習における情報資源の活用を促進する。

### 2) 研究支援

電子図書館国際会議を開催する。

平成17年8月25、26日の両日に名古屋大学、附属図書館、研究開発室及び情報連携基盤セン

ターの主催による標記国際会議を開催する。会議には、米国、中国、タイ、シンガポール等の海外からのスピーカーを含め、16の発表がある。電子図書館に関する国内外の取り組みが発表されることになっている。

電子ジャーナルのカレント版タイトル数1万2千タイトルを維持し、バックファイルを導入する。

バックファイルの導入は、雑誌の創刊号からオンラインで記事を読覧できるという利便性の向上に加え、雑誌バックナンバーの保存のあり方の再考といった面からも積極的に考えるべきである。バックファイルとしては、既にJSTORやPCI Full Text等を導入しているが、利用の多いScienceDirectのバックファイルの導入を図る。

名古屋大学学術機関リポジトリ（仮称）の試験運用を行う。

前述した実装実験プロジェクトの成果を踏まえて、「紀要情報照会システム」や「学術雑誌公開支援事業」（国立情報学研究所）により公開している紀要論文について、利用許諾を得た上で、リポジトリに登録し、試験運用を開始する。上述したように、リポジトリは、研究成果等のセルフアーカイビングを実施するための仕組みである。したがって、リポジトリの実施にあたっては、研究成果等を提供する研究者である教員の積極的な関与が不可欠であり、附属図書館としては、種々の広報手段により周知に努める。年度後半からは、教員が学術雑誌等に発表した論文等についても、リポジトリへ登録できるようにし、本運用につなげる。

### 3) 学術情報基盤の整備

情報戦略に関する学内の議論に参加し、積極的な活動を行う。

平成18年4月を目処に学内の情報化に関し、大学全体として企画立案し、整合性のあるかたちで計画を遂行する仕組みの検討が進められている。附属図書館は、学術情報基盤の整備に関して、これに積極的に関わる。また、この趣旨に基づき情報連携基盤センター、情報メディア教育センター等と協力して学術ナレッジ・ファ

クトリー計画等学術情報基盤の整備を推進する。

学生等のPC利用環境を、附属図書館として120台以上のPCを整備する。

平成16年度までに、118台のPCを整備した。平成17年度は、さらに増設し、総数を120台以上とする。今後、学生のPC携帯が多くなるに従って、更なるネットワーク利用環境の整備が必要となると考えている。

図書資料の電子的目録化率を85%以上にする。

目録データの遡及入力事業は、順調に進んでおり、毎年およそ11万件が入力されている。この事業は、平成20年度には完了する計画である。完了すれば、図書資料の全てがオンラインで検索可能となり、本学が目指すハイブリッド・ライブラリの基礎が整うことになる。

### 4) 業務運営の改善

図書館職員の組織一元化に向けた検討を行う。

本学の附属図書館は、中央図書館、医学部分館及び約30の部局図書室から構成されている。これらは、附属図書館として一体的な運営の枠組みは確保されつつも、分館及び部局図書室の運営主体はそれぞれの部局である。今後ますます厳しくなることが予想される予算、要員状況に対応していくためには、限られた資源で如何に効果的、効率的な図書館運営を行うかが重要となる。

大学全体の図書館サービス体制に基づく適正な人員配置、経費の支出に対する全学的な合意の形成、全学的な資料の共同収集・保存・利用及びハイブリッド・ライブラリ構想に基づく図書館サービスの高度化、等々の検討を含め、附属図書館組織・運営の一元化を図る。

自己点検評価・第三者評価を実施する。

附属図書館では、これまで4年毎に3回の自己点検評価を実施しており、平成17年度は丁度4回目の実施時期にあっている。対象期間は平成12年度～16年度の4年間で、平成16年度から準備を進めてきた。4回目の自己点検評価方法がこれまでと異なっている点としては、評価指

標として、できるだけ標準的な指標に基づいていること、利用者の満足度調査を実施し、利用者からの評価も加味すること等が挙げられる。

また、自己点検評価に続いて、第三者評価も実施することにしている。

これらの評価報告書は附属図書館のホームページに掲載し、公開する。

### 5) 財政内容の改善

エココレクション・データベースの作成計画の継続申請を行う。

学外からの図書館活動への支援の呼びかけを広く行う。

外部資金の導入に関しては、平成16年度に引き続いて積極的な導入を図ることとしている。

データベース構築関連では、エココレクション作成のための科学研究費補助金要求が昨年度に継続して認められた。他の助成の申請も積極的に行っていくが、今後は、「友の会」の活動と連携した取り組みも必要である。

### おわりに

以上、附属図書館の平成16年度計画の実施状況と平成17年度計画について概観した。

平成16年度計画については、全て計画どおりに実施されており、なかには、電子ジャーナル導入や社会貢献関連のように計画を上回って実施されている事項もある。

平成17年度についても、事項毎に実施手順を策定し、確実に達成することとしている。その実施状況については、ホームページのニュースやこの館燈の紙面でその都度広報していきたい。

### 参考資料

- 1) 名古屋大学附属図書館概要 2001-2005
- 2) 名古屋大学中期目標・中期計画(一覧表)  
([http://www.nagoya-u.ac.jp/out/pdf/chuki\\_ichiran.pdf](http://www.nagoya-u.ac.jp/out/pdf/chuki_ichiran.pdf))
- 3) 名古屋大学附属図書館の年度計画(平成16年度)  
([http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/nendo\\_keikaku16.pdf](http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/nendo_keikaku16.pdf))
- 4) 名古屋大学附属図書館の年度計画(平成17年度)  
([http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/nendo\\_keikaku17.pdf](http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/nendo_keikaku17.pdf))
- 5) 名古屋大学附属図書館友の会ホームページ  
(<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tomo/index.html>)

~~~~~

## 「地域環境史」へのアプローチ 2005年春季特別展を終えて

秋山 晶 則

### 1. 特別展開催経緯

自然環境が急激に破壊されつつあることへの反省として、自然と人間とが調和した環境持続(循環型)社会の実現が強く求められている。こうしたなか、附属図書館及び附属図書館研究開発室では、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受け構築中である「エコ(環境共生)コレクションデータベース」の成果公開(<http://libst1.nul.nagoya-u.ac.jp/eco/index.html>)を行うにあたり、環境を柱とする展示をあわせ企画することとなった。

その構成について頭を悩ませていた頃、学内では環境学研究科地理学講座を中心に、平成16

年度名古屋大学総長裁量経費による「自然再生のための地域環境史創出プロジェクト」が進行中であり(筆者もメンバーとして参加)、プロジェクト代表の溝口常俊教授に企画内容を相談したところ、地理学講座としても協力いただけることとなり、何とか2005年春季特別展「『地域環境史』を考える」の開催(4月4日~27日)に漕ぎつけた次第である。

なお、ここで用いる「地域環境史」とは、自然環境が人間社会とのかかわりのなかで利用・維持・改変されてきたことに鑑みて、自然再生や環境共生を考える際にも、「地域」に即しながら、そこにおいて営まれてきた暮らし(自然

利用のあり方やその矛盾)を「環境」面からふりかえり、理解することが重要であるとの立場で、「多様な学問分野が共有できる概念的ツール(溝口)」として案出された造語である。誕生から未だ日も浅く、耳慣れない言葉かもしれないが、「環境」を括りとすることで、地域を分野横断的に捉える分析枠組みとして威力を発揮することが期待されている(この概念及びプロジェクトの詳細については、溝口常俊・高橋誠編『自然再生と地域環境史』名古屋大学大学院環境学研究科、2005年、を参照されたい)。

## 2. 特別展の概要

環境を長いタイムスパンで多角的に捉えるには、様々な情報資源が必要となるが、手始めとなる今回の展示では、附属図書館が所蔵する伊藤圭介文庫、高木家文書、岡田家文書(初公開)、神宮皇学館文庫などの原資料、それらに関連諸資料を加えてデジタル処理したエコ(環境共生)コレクションデータベース、地域資料を解析したGIS(地理情報システム)画像などを通して、東海地域における自然と人間にかかわる具体的な問題をとりあげ、両者の関係についてさまざまな角度から検討を試みることにした。

具体的には、美濃山間部で、山野の過剰利用を背景とする猪や狼などの深刻な獣害や芝草山をめぐる紛争を扱った「山に生きる」のほか、

木曾三川流域における土砂堆積作用(河床上昇)との闘いに焦点をあてた「川とともに」、

前近代における都市社会(名古屋及び宇治山田)の構造を問うた「町の暮らし」、伊勢湾周辺の新田開発について、安政地震の影響など、その立地困難性について検討した「海への進出」、そしてデルタ地域の伝統的景観であった島畑の存在形態と消滅しつつある現況を示した「田と畑の景観」の5部構成で臨んだ(写真1)。

もとより、これらは「地域環境史」へのアプローチの一端、入り口の入り口を示したものに過ぎないが、山、川、海といった特徴ある空間とその資料世界を通して(エリア相互の連関までは詰め切れなかったが)、自然と人間の対立と調和の視点から、開発史や災害史をふりかえり、21世紀社会のあり方について展望する機会



写真1 展示室風景

にできればと考え、構成されたものである。

なお、関連企画として、4月9日(土)には、特別展講演会を開催し、80名をこえる参加者が、溝口常俊「地域環境史事始」、伊藤安男「河川環境変遷と住民対応」、大浦由美「木曾の森林環境を考える」の各講演に聞き入るとともに、総括質疑では、「地域(環境)は誰のものか」などの鋭い質問が飛び交い、活発な意見が交わされた(写真2)。



写真2 講演会

また、4月16日(土)の特別展資料講座では、筆者が担当して、展示資料及び公開が始まったエココレクションDBの解説を行ったが、2時間を超える講座のあとも、資料内容や環境変遷について熱心な質問をされる方々に囲まれ、その関心の高さに圧倒された思いである。

## 3. 今後の課題と展望

今回の特別展では、耳慣れぬ「地域環境史」という概念を危惧する声もあったが、結果的に

は600名をこえる参加者があり、アンケートでも「シリーズ化して欲しい」「引き続き災害史の企画を」などの声が寄せられるなど、概ね好評を得たようである。また、「貴重な資料を間近に見て感激した」等、新入生のフレッシュな感想に接することができ、年度替わりの繁忙期ではあるが、引き続き4月の特別展開催を願うものである。

しかし一方で、「各資料について、(現代語訳も含めた)詳細な説明があればもっと良かった」「展示をまとめた冊子があれば」等の声に代表されるように、準備不足が露呈した部分があったことは否めない(後出しになるが、展示図録は近々刊行予定)。また、今回の参加者のうち、学内の学生・教職員が7割以上を占めており、いまだ市民の参加が得られる企画に練り上げる必要があったかもしれない。

それには、今回のような突貫工事ではなく、企画構想から展示まで、相当な準備時間も確保しなければならない。今後、附属図書館研究開発室では、附属図書館スタッフと協力し、学内外の研究者や機関ともいっそうの連携を深めることで、学術情報や資料の新規調査・研究プロジェクトを推し進め、その成果を広く公開していくことが計画されている。室員の一人として、「地域環境史」続編?も視野に、微力ながら精一杯努めていきたい。

最後になったが、特別展開催にあたり、データベース構築をはじめ、さまざまな形でご協力いただいた関係各位、各機関、そして溝口先生及び環境学研究科地理学講座の方々に厚くお礼申し上げます。

(あきやま・まさのり 附属図書館研究開発室)

## 附属図書館 2005年秋季特別展・講演会のお知らせ

特別展テーマ：知の万華鏡 - 書物からみた18世紀の西洋と東洋 -

日時：2005年10月21日(金)～11月11日(金) 10:00～17:00(土・日とも)  
10月27日(木)は休館

場所：名古屋大学中央図書館4階展示室

講演会

日時：2005年10月29日(土) 13:00～16:00

場所：名古屋大学中央図書館5階多目的室

主催：名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

共催：名古屋大学経済学研究科、名古屋大学文学研究科、日本18世紀学会

~~~~~

## 学校図書館はおもしろい

小 倉 文 子

附属学校図書館は名大図書館の中では特殊な位置付けにある。法人化前までは供用官を置きながら名古屋大学規則集では部局図書室に数えられていない。そのような宙ぶらりんの状態のせいなのか、「学校図書館」という特殊性から

か、名大図書館への登録は長年一部分のみで、多く(約3万7千冊)は附校図書館独自の番号体系を付番して管理してきた。2002年度からは独自の番号体系は凍結し、全てを名大図書館に登録するようにした。



愛知県には県立高等学校図書館研究会という組織があり、図書情報部の教員と司書が集う。当図書館が加盟している名瀬地区研究会は活発に活動していて、コンピュータ化は常に話題に上るが、一校一館一台で完結していて、残念ながら他校との連携はない。

全国国立大学附属学校連盟（通称全附連）に所属する学校の中で、2002年当時NIIに所蔵をつけていたのは、ざっと見たところ金沢大学と名大だけであった。金大の経緯は、人員削減の結果ということであった。問い合わせた2、3の附属学校は大学図書館とは関係なく運営しているとのこと。積極的に大学図書館と関係を持っているのは、全国でも名大が初めてかもしれない。

当図書館の予算は大学からの90万円とPTA後援会からの150万円、合計240万円である。医学部から転任した私は最初一桁違うのではないかと思った。これで生徒600人、教員39人分の図書や図書館の消耗品一切合財を賄っている。その後、県立高校の情報を得たが学校図書館というのは総体的に予算が少ない所だと判った。学校図書館憲章(<http://www.j-sla.or.jp/shiryo/gaku4.html>)はこれからの学校図書館の方向性を謳っていてすばらしいが、実現にはもう少しの予算と専任の司書が欲しい。県立高校では実験助手と司書を兼ねている人が実に多いのだ。平成9年6月11日、「学校図書館法の一部を改正する法律」によって12学級以上の学校に司書教諭を置くように定められた（教育学部附属学校は該当しない）が、授業との兼務では図書館業務は無理ではないかと思う。

学校図書館の概略はこれくらいにして実態を紹介する。大学図書館と一番違う点は、生徒会活動の一つとして図書委員会があることである。附属学校の場合、各クラスから3～4名が選出され中高合計50～60名で構成され、カウンター当番、書架整理などをやる。クラスによっては希望者が多く抽選で図書委員になれない生徒もいるが、なりたくなかったのに選ばれてしまった生徒もいる。当然ながら、カウンターに座ったその後姿に温度差がある。この温度差を埋めるのは「よろしくね」という言葉かけである。信頼と責任を感じて生徒は変わってゆく。昼休

みと授業放課後の図書館の主役は図書委員と利用者である。司書は黒子である。

オンライン貸出に移行するにあたり、所蔵する図書を出来るだけ多く名大図書館に登録したいと思った。この3年間で11,770冊を受入れたが、この約7割が既にある本の登録であった。司書1人、週19時間のパート1人分では手が廻らず装備はPTAボランティアにお願いした。閲覧室で作業をするお母さん達の横で、生徒達は貸出手続きをし、本を読む。両者の関係が良い方向に動いて大きい意味の「育ち」が進んでゆく。図書館は多くの人に支えられながら、育ちの「場」を提供し、躍動感ももらう。附属学校図書館は感謝の意味も込めて2003年からPTAに本の貸出を始めた。

附属学校では年度当初、授業時間を割いて新入生に図書館オリエンテーションが行なわれる。この2年間、図書館の概要が説明された後、図書情報部（教員5人と司書）が作った＜資料探しクイズ・入門編と発展編＞が実施された。図書館中をくまなく探し回らないとクイズに答えられないように設問が工夫されている。図書館を廻るうちに色々な本に出会い、資料の配列を知り、これからの学校生活に役立てようという意図である。生徒の反応は良好で、楽しかった、こんな面白い本を見つけた、つい本の内容に惹かれて読んでしまったなどが感想として寄せられた。

最近貸出冊数が増えている。生徒の年間貸出冊数は、転任1年目が3,719冊、2年目が5,043冊、そして3年目が7,206冊である。一人あたり年間6.2冊、8.4冊、12冊と増えた。ちなみに2004年度に一番多く読んだ生徒は257冊（2人）、上半期に一番多く借りたクラスは872冊で、一人平均22冊弱であった。増えている要因はリクエスト制度の取り入れと授業で図書館及び図書資料が利用されることにある。

生徒が借り出す本は小説やスポーツの本だけではない。授業や調べ学習のテーマ本も多い。附属学校では6年間の総合学習を「生命と環境」「国際理解と平和」「仕事探しと進路」の三つに絞って主に図書館で調べ学習を行なっている。各学年とも一年かけて調べた事を学年の終りには「研究集録」という形にまとめて出版する。

参考文献や引用を書くことも指導されるので、大学生顔負けの出来栄で附属学校の宝物といってよい。木曜日は全校をあげて総合学習の時間割が組んであるので、図書館はいろいろな学年が入り乱れて書架を行き交い、参考質問が矢継ぎ早に寄せられる。百科事典、イミダスなどの使い方、NDC、目次、巻末索引の使い方、カード目録やコンピュータ検索の指導、参考図書の数々。私の頭はフル回転するが、それでも納得のいく資料に辿り着けない生徒がいる。悔しさと申し訳なさが残る。

そこで図書委員会と図書情報部と合同で今年1月全校生徒を対象にアンケートを行なった。回収率91%。少し紹介する。

図書館の利用目的を尋ねた所、授業「総合人間科」(320強)、貸出(230)、パソコン(35)、テスト勉強、自習など勉強目的(63)、暇つぶし(12)、読書(8)であった。附属学校の特性を表す数字でもある。

不明本については、記述式にもかかわらず回答者の62%が何らかの意見を表明し、そのほとんどが義憤に燃えていた。救いはあると思った。図書館利用のマナーを伝えなくてはならない。

図書館での授業で欲しい資料はすぐに見つかったかという設問には、「見つかった」が224人、「見つからなかった」が275人。内訳は中学生ほど「見つかった」率が高く、高校生ほど「見つからなかった」率が高い。これは、図書館の利用率・貸出率と比例していて面白い現象だった。図書館の面白さと利用の方法を中学生のうちに伝え、学習や図書館利用に繋がりたいと思った。

欲しい資料が見つからなかった時どうしたか？という設問には、コンピュータで探した(140)、司書に尋ねた(125)、探すのを諦めた(125)、図書館の中を片っ端から探した(123)、カードで調べた(101)、先生に尋ねた(89)、友達に相談した(89)という結果であった。図書館は探すのを諦めた生徒に対して何らかの手を打たねばならない。

図書委員会もアンケート結果を真摯に受け止め、集計報告で公約したように3月中旬、高3を

除いた全図書委員は書架整理と蔵書点検を行なった。方法は昭和20年代から現在に至る目録カードを見ながら行なうもので、草臥れ果てて座り込む生徒もいれば、図書委員ではないクラスメートに手伝ってもらっている生徒もいた。正副図書委員長は大奮闘だった。図書委員会が自主的に動き始めている。

学校図書館にはいろいろな機能があり、いろいろな生徒がやって来る。図書館が大好きな生徒も来れば、教室に居づらい生徒もやって来る。自分の考えを一方向的にぶつけて来る生徒も来れば、驚くほど素直な生徒や、好奇心旺盛な生徒も来てくれる。皆それぞれの目的と希望と問題を抱えて図書館にやって来る。それら、全ての生徒をちょっと忍耐しながら受けとめると、学年を越えて生徒同士の間が面白く廻り始める。成長期の彼らは相互に影響しあい、揉まれ合いながら、受け止めあいながら、図書委員会と利用者という一つのまとまりを形成し、更に成長してゆく。その様を見ているのはとても楽しい。

学校図書館は学校教育の中でどのような位置付けと機能を果たせばよいのだろうか。授業で役立つ事も、参考質問に答える事も、先生の資料探しのお手伝いをする事も勿論であるが、生徒が「図書館」の存在を知り、そこが知識の宝庫であり、生涯学習の場の一つであることを体得し、図書館の使い方を知り、自分の居場所を図書館に見つけて卒業してくれたなら、きっと彼、彼女の人生は少し豊かになるに違いない。そうなってくれたら、学校図書館は学校教育に少し貢献できたことになるのかもしれない。大きな意味の「育ち」に踏み台として貢献できているのかもしれない。それは、司書だけでなく、図書情報部の教員や、クラスや教科を受け持つ教員と共同して初めて出来ることである。

最近、学校図書館は図書館の原点であるような気がしている。そして元気がもらえる所である。

(おぐら・ふみこ 工学部工学研究科図書掛  
前附属学校図書室)

## 本学教員著作物の寄贈リスト

中央図書館では、教員著作物等を積極的に収集しています。平成17年4 - 5月は下記の図書を寄贈していただきました。ここにあらためてお礼申し上げます。

(寄贈者の敬称は略します。)

| 所 属              | 寄贈者名             | 寄 贈 資 料 名  | 資料ID     | 配置場所              |
|------------------|------------------|--|----------|-------------------|
| 文学研究科            | 和田 壽弘            | Three mountains and seven rivers : Prof. Musashi Tachikawa's felicitation volume / edited by Shoun Hino, Toshihiro Wada. Motilal Banarsidass, 2004 | 41378139 | 中央図<br>126/H      |
| 法学研究科            | 和田 肇             | ドイツの労働時間と法：労働法の規制と弾力化 / 和田肇著 日本評論社, 1998.2   | 11494696 | 中央学<br>366.32/W   |
| 法学研究科            | 和田 肇             | ドイツの労働時間と法：労働法の規制と弾力化 / 和田肇著 日本評論社, 1998.2   | 11494697 | 中央図<br>366.32/W   |
| 法学研究科            | 和田 肇             | 働き方の知恵 / 野川忍, 野田進, 和田肇著 有斐閣, 1999.4 (有斐閣選書; 196)   | 11494698 | 中央図<br>366.04/N   |
| 法学研究科            | 和田 肇             | 働き方の知恵 / 野川忍, 野田進, 和田肇著 有斐閣, 1999.4 (有斐閣選書; 196)   | 11494699 | 中央学<br>366.04/N   |
| 法学研究科            | 和田 肇             | 労働法の世界 / 中窪裕也, 野田進, 和田肇著 有斐閣, 2005.2   | 11494700 | 中央学<br>366.14/N   |
| 医学部<br>保健学科      | 長瀬文彦             | 免疫検査学 / 折笠道昭編集; 折笠道昭 [ほか] 執筆 医学書院, 2003.4 (臨床検査技術学; 13)  | 11494702 | 中央学<br>492.1/O    |
| 国際開発<br>研究科      | 浅川晃広             | 在日外国人と帰化制度 / 浅川晃広著 新幹社, 2003.9   | 11494701 | 中央学<br>329.91/A   |
| 国際開発<br>研究科      | 北村友人             | 国際教育開発論：理論と実践 / 黒田一雄編, 横関祐見子編 有斐閣, 2005.4  | 11495785 | 中央学<br>370.4/Ku   |
| 国際開発<br>研究科      | 三輪千明             | Early childhood developmentの支援に関する基礎研究 / 三輪千明 [著] 国際協力機構国際協力総合研修所, 2004.8 (総研; R 03-54 . 国際協力機構客員研究員報告書; 平成15年度)                                   | 11495784 | 中央学<br>333.8/Ko   |
| 国際開発<br>研究科      | イゴリ R.<br>サヴェリエフ | 移民と国家：極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民 / イゴリ・R・サヴェリエフ [著] 御茶の水書房, 2005.2   | 11494694 | 中央学<br>334.4292/I |
| 総合保健体育<br>科学センター | 出原泰明             | 体育実践とヒューマニズム：学校体育研究同志会50年のあゆみ / 学校体育研究同志会編 創文企画, 2004.12   | 11494703 | 中央学<br>375.49/G   |
| 総合保健体育<br>科学センター | 出原泰明             | スポーツにおける名誉や称号 / 中村敏雄編 創文企画, 2005.4 (スポーツ文化論シリーズ; 13)   | 11494704 | 中央学<br>780/N      |
| 総合保健体育<br>科学センター | 出原泰明             | 異質協同の学び：体育からの発信 / 出原泰明著 創文企画, 2004.7   | 11494705 | 中央学<br>375.49/I   |
| 総合保健体育<br>科学センター | 出原泰明             | 異質協同の学び：体育からの発信 / 出原泰明著 創文企画, 2004.7   | 11494706 | 中央図<br>375.49/I   |
| 総合保健体育<br>科学センター | 西田 保             | 期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究 / 西田保著 杏林書院, 2004.1   | 11494695 | 中央学<br>375.49/N   |

## 利用者から見た図書館

# 学外からの貸出・複写利用

鈴木 隆 将

大学図書館の利用法は様々あると思うが、所蔵されている図書の借り出しと同じくらい私が利用している内容は、他大学に対して、本の借用や論文複写を依頼することである。近年では、ネット上でいわゆるNACSISと呼ばれる大学横断検索を使えば、どの大学に自分の見たい本が所蔵してあるのかを一発で知ることができる。私が属している文学部では、図書掛を通して希望する図書の借り出しを申し込めば、約1～2週間で本が届く。院生の私にとって、遠くの大学図書館へは、研究会や学会等で訪ねる機会があるのみで、しかもその図書館にその時見ておきたい図書があるとは限らない。その意味で、このサービスは本当にありがたい。

しかも、このサービスはもちろん国内にとどまるものではない。むしろ、簡単には行くことのできない海外に対して、その価値は高まると言えるであろう。私は、西洋史の中でも中世ドイツ史を専門としており、ドイツ語の文献やラテン語の史料が必須である。そして、研究をおこなう際に必要なそれらの資料が国内の図書館にないことが少なくない。そうなると、今度は中央図書館にある相互利用掛を利用する。最近、海外の大学図書館における図書検索はもちろんのこと、NACSISと同様に世界の大学図書館を横断して検索することができるまでになっている。これらの検索サイトは、中央図書館の

ホームページからはいることができ、例えば私がよく見るものは、K V K (ドイツ語圏所蔵目録横断検索)と呼ばれるものである。

海外の方は、もちろん本が届くまでの期間が月単位となる。ただ、借用ではなく論文の複写であれば、B L (British Library) に関しては一週間程度で手に入れることができ、まさに驚きのはやさである。しかし、私は専門の関係でドイツに本を頼むのであるが、残念ながら実際にその本を手にするには、依頼した半分にしか満たない。残りの本に関しては、なしのつづて状態であり、そのまま放置しておくとも一年という月日も簡単に過ぎてしまう。少し極端ではあるが、研究室の先輩が頼んだ本が、本人が大学を出てから届いたという例もあるくらいである。基本的には、しばらく音沙汰がないので、こちらからカウンターに出向いて、それでようやく状況を教えていただき、今後の対応を聞かれる。確かに、職員の方々はこの仕事だけに煩わされるわけにはいかず、一方で対応する海外の図書館側の事情もあるだろう。しかし、だからといって現在の状態のままであれば、このサービスは機能していないのも同じである。グローバル化といわれる昨今において、海外の図書館との交流はますます深まるばかりであり、いち早く改善されることを切に望む。

(すずき・たかまさ 文学研究科博士課程後期3年)

## ●●●●●●●●●● [利用者向けの行事等] <17.4.6 ~ 17.7.5 > ●●●●●●●●●●

- ・基礎セミナーTAに対する図書館情報探索法講習会 (於: 附属図書館) <4.6 ~ 5.13>
- ・留学生ガイダンス・ツアー (於: 附属図書館) <4.8,11,13>
- ・図書館利用ガイダンス (於: 附属図書館) <4.13 ~ 15,18>
- ・電子ジャーナル等講習会 (於: 附属図書館) <4.22,25 ~ 27> 部局動向
- ・法: 土曜日利用開始<6.4 ~ > : 3,8月を除き13:00 ~

17:00 部局内の院生・教職員が利用可に  
・国際開発: 新入生ガイダンス<4.6 ~ 8>、日本語文献検索説明会<4月随時>  
編集委員会  
白井克巳 (委員長) 前川宏司 (中) 森田友久 (中)  
照井香 (中) 渡邊通江 (文) 岡田智行 (経)  
伊藤由美 (理) 山田敦子 (農)